

法華経と現代文化の諸問題

マルガリータ・ヴォロビヨワ¹ デシャトフスカヤ
前川健一 訳

仏教の存在を知った当初、西欧人はまずヨーガや集
団催眠、身体統御の技術などに興味を持ちました。一
方、十九世紀末以来、学者たちが関心を示したのは仏
教哲学でした。二十世紀中葉に至ると、仏教は精神分
析家たちの注目を集めました。この二つの領域を結び
つけた先駆者の一人がエーリッヒ・フロムです。なぜ
インド的な心のコントロール法に特別な関心を抱くの
か、という問いに対して、フロムは次のように書いて
います。「我々が死ななければならぬ」という事実は、
人間にとって如何ともしがたいものである。人間はこ

のことを意識している。そして、この意識そのものが
人生に深い影響を及ぼすのである」。⁽¹⁾ 不快な瞬間を可
能な限り遠ざけようとして、人は様々な教えに救いの
道を求めます。仏教は、不死の獲得を約束する教説に
見えたのです。

仏教の三蔵のうち、最初期において最もよく知られ
たのは、第二の部分すなわち経でした。⁽²⁾ それは本来、
口頭で説かれることを意図した、哲学的教義を述べる
典籍です。経に説かれる思想そのものは、古代インド
の全ての教説と共通のもので、文字に記された仏教

經典は、最古のもので、紀元前一千年紀の終わり頃を遡ることはありません。

紀元前一世紀以来、現在にいたるまで、最も人気を博した經典は一貫して法華經でした。この論文では、カシユガル本（厳密に言えば、コータン本⁽³⁾）にもとづいて引用します。何よりもまず疑問に思うのは、なぜ法華經はそんなに長きにわたって人気があるのか、ということでしょう。

法華經の冒頭、ブツダは多くの衆生に囲まれて坐しています。その中には、彼の弟子、菩薩、神々、東西南北それぞれの支配者、その他の一切衆生がいます。そこで、ブツダは「甚深未曾有の法」を説きます。この法は理解しがたいため、ブツダは、人々が成長し、彼らの本来の目的が、このうえない悟り（阿耨多羅三藐三菩提）を獲得すること、すなわち涅槃の境地を得ることであると理解できるまで待つていたのです。涅槃への道は長く困難なものです。それ故、我々はブツダにしたがい、その教えの展開に含まれる幾つかの点について考えなければなりません。これらはこれまで

学者たちが取り上げてこなかったものです。

ブツダの教えに導かれた人々（その中には最初の弟子たちもいます）は、ブツダの最初の説法を聞き（それ故、声聞と称されます）、四聖諦と八正道を学びました。これらは阿羅漢へと至る道であり、涅槃を獲得する道でした。こうしたこと全てはジャータカの中に見事に描かれています。法華經の第二章（方便品）で、ブツダは声聞たちの心が次第に成長していく様子を示しています。そこでは、弟子たちによる善行の数々が列挙されています。説法は決して無駄ではありませんでした。それは、豊穡な大地に信仰の種子を播いたのと同じです。

第十六章（寿量品）で、ブツダは「如来の秘密」を語り、自らの真実の境地を示します。

「一切世間の天・人は、……皆な今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり。然るに、善男子よ。我れは実に成仏してより已來、無量無辺百千万億那由他劫なり。……是れよりこ

のかた、我れは常に此の娑婆世界に在つて、説法教化す」

声聞たちの仏教理解が深まるにつれ、自分たちの目の前にいるブツダこそが、彼らを蘇生させ、涅槃へと導くものであることが、実感されるようになってきました。彼らの中には、ブツダがいつの日か彼らのもとを去り、涅槃に入ってしまうのではないかと、心から憂うる者もいました。ブツダの近くにいなながら、ブツダを見ることができない者もいました。さらに、ブツダは既に去り、涅槃に入ってしまったと考える者もいました。ブツダには、こうしたこと全ては、信仰心など様々な能力の「利鈍」^{リドゥン}によるのだと分かっています。彼は仏眼によってこのことを見抜き、すでに信仰を得たものを導くため種々の手立てを用いたのです。

經典ではしばしば弟子たちが如何に尊貴であるかを説きます。第二十章（常不軽菩薩品）でブツダは、常不軽菩薩（「決して軽蔑しない」と称される菩薩）について語ります。何処であれ、誰であれ、この菩薩は出会った人々全てに礼拝し、次のように言うのです。「私

はあなたがたを尊敬し、決して軽蔑したりいたしません。何故なら、あなたがたは皆、菩薩の道を歩み、仏になるからです」。彼は馬鹿にされ、棒で打たれたり、石を投げつけられたりしましたが、彼はその場から逃げ出しては、再び大声で繰り返すのです。「私はあなたがたを軽蔑しません。何故なら、あなたがたは皆、仏になるからです」

仏教の伝統では、全ての人は仏の要素を持つており、この小さな芽は遅かれ早かれ実をつけるとされています。極貧で、苦境をかこつ、不幸な人であっても、仏の教えに耳を傾ければ、どれほど時間がかかるにしても、いずれ仏になるのです。阿闍世王や提婆達多^{あじやせ たいはだつた}は、何度もブツダを殺そうとしましたが、彼らですら、他の人より時間はかかるにせよ、必ず仏になるのです。こうした教えが、人々を魅了するのは、言うまでもありません。

法華経の中で、ブツダは弟子たちが徐々に成長することを説明します。初めて説法を聞いた時、彼等は完全には理解できませんでした。何が苦をもたらすの

か？ 苦を取り除く方法はあるのか？ ブツダの答えは「然り」でした。「苦を除く方法はある」。では、それは何なのか？ 八正道がそれなのか？ 賢い弟子たちにはその意味が分かりました。しかし、他の弟子たちには分かりませんでした。池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長の書かれた本の中には、師匠である戸田城聖先生のもとで法華経を学び始めたことが記されています。現在、SGIは世界的に有名であり、ヨーロッパおよびアジアのほとんどの国に支部を有しています。

我々は、ここで、法華経の第二章（方便品）に見られる仏教思想、とりわけ三乗説について考察してみたいと思います。仏教の伝統説では、最初の段階の説法で生み出された弟子たちを「第一の乗り物」ないしは「声聞乗」と呼んでいます。仏滅後、次のブツダが生まれるまでの、無仏の世に、自らの力で仏説を理解できる人々が出現します。こういう人は極めて少数ですが、存在しないわけではありません。仏教の伝統説では、このような仕方では涅槃を獲得すること（どっかく）「独覚乗」

と呼んでいます。最後に、全ての人々が自らの不幸を実感し、不幸を脱するための方法を学ぶ時が来ます。この時、ブツダは菩薩の手を借りてこの不幸な人々を救おうと決心するのです。菩薩とは、釈尊の弟子たちのうち、無上正等覚（阿耨多羅三藐三菩提）の境地に達し、もはや涅槃に入るばかりという状態になった者のことです。菩薩は自身の救済を犠牲にして、独力では「彼岸にわたる」ことができない不幸な人々を助けようとするのです。このように菩薩の助けを得て彼岸へとわたる人々は、第三の乗り物に乗ります。すなわち大乘です。結果的に、三種類の仏教信者は、涅槃へと到る三種類の異なった方法を用いているように見えます。

「乗」とは「智慧のレベル」

疑問なのは、なぜ、この涅槃へといたるプロセスに、「乗り物（*Yana*）」という言葉を使ったのかということ。この文脈の中では、「乗り物」は「彼岸へと到る」方法を示す定型的なシンボルのように見えます。一

方、「彼岸」すなわち涅槃は、万人にとって同じもの
 です。三乗をつぶさに観察するなら、それぞれの「乗」
 の名称によって示されているのは、涅槃に至る有資格
 者は、その心の発達の程度に応じて区別されるという
 ことである」との結論に達せざるを得ません。突如と
 して、ブッダは法華経の中で次のように宣言します。
 〓三乗は存在しない。全ての人に救済をもたらす唯一
 の「乗」があるだけだ。それこそ「仏乗 (Buddhayaṇa) 」
 である」と。

ブッダはあらゆる衆生の父であり、全ての生死の苦
 しみから救い、救済へと導くことができるのは彼だけ
 です。中国の学僧・法雲は『法華義記』（大正藏
 三三・五九二〜五九三頁）の中で、次のようなことを述
 べています。

〓一乗とは「仏乗」である。二乗とは「声聞乗」と「縁
 覚乗」である。三乗は、上に述べた二乗に「菩薩乗」
 を加えたものである。これら三乗は第四の乗、すなわ
 ち一乗に対比される。このような対比がなされるのは
 何故かと言えば、かつてブッダは、衆生の機根に応じ

て「三乗」を説いた。しかし、それらは「一時的な教
 え」（方便智・権智）に過ぎなかった。今や、釈尊の教
 えによって、人々は自らを純金でできた像（真金之像）
 のように感じている。言い換えるなら、「唯一の教え（教
 一）、唯一の道理（理一）、唯一の機根（機一）、唯一の
 衆生（人二）があるのみだ」ということである。

ここで、さらに次のような疑問が生じます。「どう
 して衆生の機根を示すのに『乗』という語が使われる
 のか？」⁽⁴⁾ この問題を最初に提起したのは、辛島静志
 氏の論文です。彼が証明したのは、法華写本の中でも
 筆写年代の古い断片は、サンスクリットではなく、中
 期インド語に属するブラークリット⁽⁵⁾で書かれていると
 いうことです。法華経が最初に筆写されたのはマガダ
 国においてであるという仮説⁽⁶⁾（この仮説は、リュエーダー
⁽⁶⁾スをはじめ多数の学者に支持されています）を受け入れる
 なら、この経典はマガダ語で最初に書かれたというこ
 とになります。しかし、写本によれば、この経典はマ
 ガダ語ではなく、混淆サンスクリットで書かれている
 のです。そのため、写経者は「Buddhājñāna（仏智）

を、Buddhayaṇa(仏乗)に置き換えたと考えられます。もしそうであるなら、「乗」は「智慧のレベル」や「精神的発達のレベル」を意味するものとなるでしょう。

辛島氏は研究を進め、多くの仏教典籍の中に、jñānaとyānaが置き換えられた可能性を示唆する箇所を発見しました。⁽⁷⁾ たとえば、次のような箇所がそうです。「若有衆生、從仏世尊聞法信受、勤修精進、求一切智(sarvajñāna)」、仏智(buddhājñāna)」、自然智(svayambhujñāna)」、無師智(ānācāryaka jñāna)」、(中略)是名大乘(mahāyāna。O. tathāgatayāna)」、菩薩求此乘故、名為摩訶薩⁽⁸⁾」

仏教の「精神的技法」の有効性

法華経が示すもう一つの基本的思想は重要です。弟子たちに向けて、ブツダは自身が、力・無所畏・禪定・解脱三昧を獲得し、未曾有の法を成就していることを告げます。実践的技法の面から言えば、禪定と三昧という二つの言葉、すなわち瞑想はブツダの思想を精神分析に結びつけるものです。禪定(dhyāna)は、サン

スクリットでは、二つの意味を持っています。⁽⁹⁾ 一つは、生存の状態であり、もう一つは、精神集中の状態です。

ヴァスバンドゥ(世親)は、禪定(静慮)を「善性の心であり、単一の対象への集中である」とか「善性の心が専一である状態」と定義しています。この「善性の心が専一である状態」の本質は、集中すなわち三昧(samādhi、三摩地)に他なりません。集中は単一の対象に対して起こる精神現象です。この場合の禪定は、深い集中の中で立ち現れる精神的対象を表象すること、すなわち、ありのままの真実と合致した知覚です。dhyānaという語はdhyaiという語根から派生したものです。この語根は「集中して考える」の意味です。ヴァスバンドゥは、集中して考えることは智慧に他ならないと述べています。

西暦紀元前後より、脳内現象の展開過程は仏教徒の興味の対象でした。法華経では、三種類の三昧を説いています。どんな時でも、ブツダは説法を始める前に、三昧の状態に入ります。すなわち、「空」を対象とする瞑想のもとで、説法を始めるのです。この「空」と

は何か？ これは知覚の過程、すなわち脳の働きそのものと関係しています。世界は心が作り出したものであり、実在するものは何もありません。「個々の事物（タルマ、法）」は「固有の本性」を有していません。つい

には、全ての対象への「束縛」は消えうせるのです。

V・G・ルイセンコによれば、仏教の瞑想は「バラモンや出家修行者のヨーガの伝統にもとづいている」とのことです。⁽¹⁰⁾法華経においては、「瞑想」という語

は二つの異なった意味を有しています。一つは、精神

集中の実践 (Dhavana) です。それは、初めは美しいものに心を向け、次第に卑俗なものへと下降していきま

す。このようにして、一回の瞑想の間に、人は脳の中で「一生を生きる」のです。これは心をすつきりとさせ、認識の地平を広げ、精神的・肉体的向上をもたらします。このプロセス自体が、精神分析が仏教の精神的実践に起源を有することを示しています。法華経の重要さは、単に全ての仏教徒の必読書であるというにとどまらず、脳機能にまつわる錯綜した諸問題を学ぶ上での出発点となることにあります。今日でも、こ

のような観点からの法華経の正当な位置づけはなされていません。

ヨーロッパでは、伝統的に、仏教を「信仰も神もない」宗教と見なしてきました。たしかにブッダは神ではありません。しかし、一方で、寺院に安置された仏像は、神のように見なされてきました。それは祈りの対象でした。ブッダの遺骨（舍利）が埋葬された場所には、礼拝の場が作られ、宝石や花で飾られ、香が焚かれました。一言で言えば、崇拜の対象となったのです。仏像を寺院に安置することは、ローマ・カトリックの伝統と比較することが可能でしょう。しかし、一方、釈尊以前に無数のブッダがいたとされ、さらに、法華経の中では「無量の時間の後には、全ての人が仏になる」と説かれます。この点で、キリスト教のどこにも仏教と類比できるものではありません。

神なき信仰は不可能であるように見えます。しかし、私の説いた教えは多くの人々の信仰を獲得しました。ヨーロッパで、アメリカで、バルト諸国で、そして、ロシアで、仏教信者は増え続けています。この東

洋の哲学と、それを記す経典が、解決の糸口を与えてくれるのは、中期の精神的危機だけではありません。青年期のさまざま問題を克服するチャンスが得られます。東洋の精神技法は、ビジネスマンにとっても有効であることが示されました。彼らは、頻繁ひんぱんにそれを利用してきます。精神分析の道は哲学によって舗装されました。

サンクトペテルブルク学派は、この潮流に決して遅れをとってはいません。F・I・シエルバツコイ(11)によって創始された、この学派は今も大きな成果を出し続けています。ヴァスバンドウがサンスクリットで書いた『俱舎論(アビダルマコーシャ・パーシユヤ)』は大部なものですが、その翻訳も完成しました。日本の研究者や哲学者との実り多い関係も築かれました。仏教団体である創価学会と、その指導者である池田大作SGI会長は、文化と学術の発展に多大の貢献をなされてきました。そのおかげで、文化研究と政治研究は強力な推進力を得てきたのです。

注

- (1) Fromm, Erich, *Man for Himself*, 1947, Chapter III-1-b.
- (2) (訳注) 一般に「三蔵」は経・律・論の順番であるが、三学である戒・定・慧と関連づける時は、戒が律、定が経、慧が論に対応する。(こ)では、後者の立場から、経を「第二の部分」と呼んでいる。
- (3) (訳注) いわゆる「ベトロフスキ本(中央アジア本)」のこと。カシユガル駐在のロシア総領事ベトロフスキ(一八三七―一九〇八)が入手したもののだが、実際に出土したのはホータン近辺とされている。南条文雄とケルンによる梵文法華経校訂出版に際しては、オックスフォード大学教授ヘルンレ収集の断片を利用したため、O. という略称で記される。
- (4) Karashima, Seishi, "Who Composed the Lotus Sutra? : Antagonism between wilderness and village monks." *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University for the Academic Year 2000*. Tokyo: Soka University, 2001, 171-173.
- (5) (訳注) サンスクリットが、厳密な文法規定にしたがう正統的なインドの言語であるのに対して、同系統に属しながら音韻などの面で差異を示す言語を一括してプラークリットと称する。後述の「混淆サンスクリット」は、部分的にプラークリットの特徴を示すサンスクリットのこと。
- (6) (訳注) ハイニンリッヒ・リュエーダース(一八六九)

一九四三)。ドイツのインド学者。

- (7) Karashima, Seishi, "Some features of the language of the *Saddharmapuṇḍarikāśāstra*." *Indo-Iranian Journal* 44: 2001, 207-230.

- (8) *Ibid.* 216. (訳注) Kern & Nanjio pp.80-81. 羅什訳「譬喩品」(創価学会版『妙法蓮華経並開結』一七二頁)。

O. (中央アジア本)の該当箇所は Toda, Hirofumi ed., *Saddharmapuṇḍarikāśāstra: Central Asian Manuscripts Romanized Text*. Tokushima: Kyōiku Shuppan Center, 1983. 45 (87b-7).

- (9) (訳注)以下の記述は『俱舍論』に基づいている。玄奘訳の該当箇所は以下のとおり。「論曰。一切功德多依静慮。故応先辯静慮差別。此総有四種。謂初二三四。四各有二。謂定及生。生静慮体世品已説。謂第四八。前三各三。定静慮体総而言之是善性撰、心一境性。以善等持為自性故。若并助伴五蘊為性。何名一境性。謂專一所縁。若爾即心專一境位。依之建立三摩地名。不應別有余心所法。別法令心於一境転名三摩地。非体即心。豈不諸心刹滅故皆一境転。何用等持。若謂令心於第二念不散乱故須有等持。則於相應等持無用。又由此故三摩地成。寧不即由斯心於一境転。又三摩地是大地法。応一切心皆一境転。不爾。余品等持劣故。有余師説。即心一境相統転時名三摩地。契経説此為增上心学故。心清淨最勝即四静慮故。依何義故立静慮名。由此寂靜能審慮故。審慮即是実了知義。如説心在定能如実了知。

審慮義中置境界故。此宗審慮以慧為体。若爾諸等持皆応名静慮。不爾。唯勝方立此名。如世間言発名日非螢燭等亦得日名。静慮如何獨名為勝。諸等持内唯此撰支止観均行最能審慮。得現法樂住及樂通行名。故此等持独名静慮」(大正藏一九・一四五上〜下)。

- (10) B. Г. Дысенко, "Ранняя буддийская философия." М., Издательская фирма. Восточная литература РАН, 1994, с. 183-193.

(ウイクトリア・ルイセンコ「初期の仏教哲学」)

- (11) (訳注)ロシアソ連の仏教学者(一八六六〜一九四二)。仏教全般にわたる体系的研究で重きをなす。日本では「チエルバツキー」「シチエルバトスコイ」などとも表記されている。

(M・I・ヴォロビヨワリデシャトフスカヤ／ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所研究員
シンポジウムには出席せず、本論文は代読された)
(訳・まえがわ けんいち／東洋哲学研究所研究員)